



ご存知ですか、野口英世アフリカ賞

我が郷土の医聖野口英世博士は、幾多の障害を乗り越え、天性の忍耐力で世界的に名声を上げた日本が世界に誇る医学者です。

博士は晩年アフリカのガーナに渡り、黄熱病の研究に身を捧げる途中で自らも黄熱病に感染し、1928年、51歳で亡くなりました。

日本政府は、2006年5月の小泉純一郎首相(当時)

第2回野口英世アフリカ賞受賞者決定

受賞者は、アフリカでの感染症などの疾病対策のための医学研究または医療活動のいずれかの分野において顕著な功績をあげ、アフリカに住む人々の保健と福祉の向

医学研究部門：ピーター・ピオット博士



ピーター・ピオット博士(ベルギー)
ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院学長

ピーター・ピオット博士は、HIV/エイズやエボラ出血熱をはじめとした感染症の研究にアフリカの現場で長年携わってきたばかりでなく、国連エイズ合同計画(UNAIDS)事務局長を務めるなど、世界で研究と政策の橋渡しを行ってきました。

第2回野口英世アフリカ賞の受賞者来町 ～野口英世博士の志を21世紀に引き継ぐ～

のアフリカ訪問をきっかけに、野口英世博士の功績にあらためて光を当て、国籍を問わず、アフリカの医学研究や医療活動の分野で卓越した業績をあげた方々を表彰する「野口英世アフリカ賞」を創設しました。

感染症のまん延に表れている通り、アフリカの保健・医療は、野口英世博士の死後85年を経た今も引き続き厳しい状況が続いています。この困難を乗り越えるために、忍耐と勇気を体現した野口英世博士の精神が求められています。

この精神を世界に広めることが、「野口英世アフリカ賞」の理念です。

上に貢献した方々です。特に医療活動については、受賞理由となる活動をアフリカで実施した、またはその活動基盤をアフリカに置く方々となっています。

医療活動部門：アレックス・コウティノー博士



アレックス・コウティノー博士(ウガンダ)
マケレレ大学(ウガンダ)感染症研究所所長

アレックス・コウティノー博士は、エイズへの偏見が根強い時代からHIV/エイズ患者の治療を行うと同時に、アフリカの人々の治療の機会を増やす戦略を立て、その方式をアフリカ中に広めました。

第2回授賞式・猪苗代町ほか訪問

第2回授賞式は、第5回アフリカ開発会議に合わせて6月1日、横浜市内で開催されます。翌日の2日に受賞者のお2人が来町され、野口英世記念館などゆかりの地を訪問する予定となっています。

受賞者訪問スケジュール 6月2日(日)

午後1時30分 歓迎セレモニー(野口英世記念館前)

野口英世記念館視察

町総務課 秘書広報係 ☎(62)2111

午後4時 トークセッション「未来デザイン2050」に参加
(会津大学、入場無料)

町新生日本・再生故郷実行委員会事務局

(会津若松市企画調整課) ☎(39)1201



第1回(2008年)の受賞者来町の様子。歓迎のため、野口英世記念館に多くの人が訪れた

2008年第1回野口英世アフリカ賞受賞者の近況

ブライアン・グリーンウッド博士(イギリス出身)は、アフリカでの30年以上にわたるマラリアをはじめとする感染症の多角的研究と実践対策の功績により受賞。第1回「野口英世アフリカ賞」の賞金で感染症、公衆衛生、熱帯医学関係の分野のアフリカの若い科学者の養成を目的とした「アフリカ・ロンドン・長崎(ALN)奨学金」を創設しました。2010年から毎年5名ほどのアフリカ人奨学生がロンドン大学衛生熱帯医学大学院や長崎大学熱帯医学大学院において研究に取り組んでいるとのこと。

ミリアム・ウェレ博士(ケニア出身)は、40年間にわたり、地域レベルでの医療サービスの提供を実践し、アフリカの人々の健康と福祉の増進に献身した功績により受賞。その賞金を使い、コミュニティヘルスワーカーの養成、エイズ遺児のケア、母子手帳(日本発祥)をアフ

リカに普及させる活動に尽力中とのことです。2011年10月には「東日本大震災で被災した福島を訪問し激励したい」という博士たつての希望により本県を再訪しました。



ウェレ博士(左)とグリーンウッド博士(右)

特殊切手「第2回野口英世アフリカ賞」の発行について

今回の切手デザインには、博士の肖像写真のほか、博士が愛用していた顕微鏡と地球儀、博士の故郷である福島県の花であるネモトシャクナゲおよび母シカ直筆の手紙を取り上げました。シート余白には、博士自作の絵画カンゾウの花があしらわれています。会津若松市出身の

切手デザイナー、中丸ひとみさんによるもので、ふるさと福島への思いを込めてデザインされました。5月31日から郵便局などで発売されます。なお、野口英世の里郵便局では、初日印のサービスがあります。ぜひ、皆さんもお手にとってご覧ください。